

俳人一茶

淺野正一

一、境遇と作句とより推せらるる彼の性格の變轉

憂鬱 — 樂天 — 不平

附一、結婚問題

二、彼の信仰

二、彼の趣味嗜好

一、酒と演劇

二、蛙と猫

三、彼の俳句の分解

一、内的分解

二、外的分解

研究と云はんには余りに獨斷で、論説と云はんには余りに粗雑である、たゞ私は此の中で諸君と一緒に一茶が味ひ度いのであります。

一茶の大好きな私はその俳句を愛讀する毎にその作物を通じて一茶なる人を色々と想像して居たが今度或機會から此の私の描いた一茶を眞の一茶に比較するを得て多大の興味を感じ想像と事實の上に立脚した此の拙い一篇を筆にするに至つた次第であります。

一茶は寶曆十三年信州水内郡柏原驛（長野縣）小林家に次の系圖の下に生れた。

（先妻）逸名

—孫太郎(後に一茶)—

(祖母)彌五兵衛——(父)彌五兵衛(幼名仙太郎)

—仙六(後に彌兵衛)—

(後妻)さつ女

彼の出生當時の家産は田地約一石四斗畑地約二石六斗約二百〇七坪の宅地及土藏一棟で他に副業として駄馬業を營み他家に比して可成り富裕であつた従て彼は長男として相當に甘かされて育てられた。尤もその母は彼の三才の時即明和二年に病没したが情深い祖母かな女は此の初孫のために喜んで襁褓の面倒を見て呉れたので、幸にも此の悲惨事は幼い彼には物質的にも精神的にもさしたる打撃は與へなかつたのである。然るに彼の八才の時即明和八年父は老年の祖母に家事を見せしめるに忍びず村人の勸めるまゝに後妻さつ女を娶つた。さつ女は初め一茶を勞はつたが實子仙六を生むに至つて矢張世間の繼母並みに其の虐待の手を一茶の上に延すに至つた。父は極く人の好い人で万事繼母任せであるし祖母の一茶に對する愛情は却て彼女の憎さを増して虐待は日々その甚しさを増した。彼は自ら(左の文は「俳諧寺一茶」よりの引用文なれどその出所不明後証をまつ)

信立(一茶の名)弟仙六の抱守りに春の暮おそきもはなに涎の衣を絞り秋の暮はやきも尿に肌を乾く時なかりき。仙六むづかる時には態となんあやしめる如く父母に疑はれ杖の憂目を見ること日に百度月に千度一年六百五十九日目の睡れざることなかりけり云々
と云ひ「オラが春」に

「親のない子はどこでも知れる爪を啞へて門に立つ」子供等に唄はるゝも心細く大方の人交りもせずして裏の○に木萱など積みたる木蔭にせぐゝまりて永の日を暮しぬ我身ながら哀なりけり云々と嘆じ

俺と来て遊べよ親のない雀

まゝつ子や涼み仕事に藁叩く

と血を吐く様な感慨を洩した、かくて柔順であつた彼の性質は次第に憂鬱に傾いて行つた。次で、十四才の時即安永五年此の冷めたい家庭を辭して江戸へと志した此の家出に付いては色々議論もあるが彼が一茶一代全集に「園原やそのはゝならぬはゝきゝに住み馴れし伏家を掃き出されしは十四の歳にぞありしが云々」といつて居るのが一番有力な説明ではあるまいか。一茶は嘘のつける人ではない。此年祖母が歿して懐しい故里には彼の立寄るべき木蔭も失せて彼は却て海山遠く距てた江戸の地に於て初めて自由の天地を見出した。此に於いて苦しい繼母の苔の下に痛しい月日のみ送て居た彼はその句が示すが如く反動的に素的な樂天家となつた。かゝる経路は彼以外の人の多くにも見出し得る所である。

君が代の大飯食つて櫻哉

膝抱いて羅漢顔して秋の暮

人が來たら蛙になれよ冷し瓜

瓜を冷して自分は晝寝でもしたのか。其の呑氣さが見わる。

立ちながら綿踏み抜いて出たもけり

南阿彌陀とてらの綿よ暇やるぞ

妻の妊娠中火災に遭ひて

營火もあませばいやはやこれはいはや

焼けあとやばかりくそ蚤騒ぐ

日が永い／＼このらりくらりかな

然し一簣一杖驕然故郷を後にした彼は生存競争の盛な江戸に於いて到底生活の苦から脱することは出来なかつた然し猶彼は平氣に其の貧乏に甘んじて居つた。

明月の御覽の通りの屑家哉

有り合ひの山で濟すや今日の月

六月御祓の句に

麻の葉に借金書いて流しけり

柴の戸や錠の代りに蝸牛

十月の神々の出雲旅行に

我宿の貧乏神も御供せよ

年暮の煤拂の句に

庵の煤風が拂うて暮れにけり

「裏長屋の突當りに住す」その前置の下に

涼風の曲りくねつて來りけり

人を見て又々無理に晝寢哉

人は多分借金取りであらう

かく呑氣に構へては居たものゝ彼も先づ生きる必要から命の糧を求むべく所々に奉公して廻り稍々長じてからは友なる淺草の隨齊成美（人名辭書のは誤）の宅に食客となり乞食客一茶寺と稱して居た。一方故郷では彼の卅九才の時即享和元年父が病沒した、かくて彼は肉体的にも精神的にも可成り堪へ難い苦痛を脊負はねばならなかつた。加ふるに父の遺言は身代を彼と異母弟仙六にて等分すべしといふのであつたがこのことから端なくも一茶と繼母及仙六との間に葛藤を惹起し一度段落したが遂に繼母等の奪ふ所となつた。彼は

故郷や寄るもさはるも茨の花

故郷や西も東も茨の花

故郷は蠅迄人を刺しにけり

と遺瀨ない感慨を洩して薄倅詩人バネロンの様に斷然郷里を後にして遠い旅路に上つた。その間に江戸の草庵を家主のために無斷押收される等の事があつて洒落呑氣に一變して居た彼の性格の半面には次第／＼に不平怨恨が其の色彩を増して行つた。彼の痛烈な罵倒や刺す様な皮肉はかくして次第／＼に養成せられたのである。そして彼のその舌鋒は先づ貴族に向けられた。

侍に蠅を追はせる御馬哉

人は武士君小粒でも唐辛

其の分にならぬ」と蟻螂哉

瘦侍が見ゆる様だ

世にあれば無理に溶かすや門の雪

下駄コロリチャラリ彼奴等の夕涼

コロリは男、チャラリは女か。富家の子女の夕涼が彼の癢に觸つたのである。

彼の如き皮肉屋の前に對しては先輩も余り權威がなかつた。

芭蕉忌や今年もめで旅虱

翁忌や何やらしやべる門雀

忌はいふまでもなく十月十二日である。又加州候が出府の途次使を以て旅宿に招いたが應せず却て「御用あらば此方へ御座れ」と氣焰をあげた。

次に彼の舌鋒は最も優雅なるべき景物に對して

草庵や馬鹿丁寧な五月雨

小杜鹿の水漬拭ふ紅葉哉

草山の肥しになれや春の雪

庵の雪下手な消に様したりけり

宗因(?)の「白露や無分別なる置き所」と對比して妙。

女郎花あつけらかんとして立てり

淺間しや一寸脱れに残る雪

彼は又人が名所くど騒ぐのも瘠に觸つた

かしましや江戸見た雁の歸り様

櫻花見るも義理なり京住の

誰かの句に「名月を他所に一茶の宵寝哉」と云ふのがあるが實際一茶のやり相なことである。
次に彼の舌鋒は最も謹嚴なるべき歴史に向けられた。

仲國の耳に邪魔なる砧哉

みちのくや判官殿を田植歌

虎の雨など輕んじて濡れにけり

これは罵倒家稍々失敗の光景である。虎の雨は大磯の遊君で曾我祐成の情人虎御前が曾我兄弟の死を悼む
の涙が雨となり祐成最期の五月二十八日に降るのである。

次いで彼の舌鋒は宗教に向けられた。

御佛や寢て御座つても花と錢

晝の蚊を後に隠す佛かな

人のため時雨れて坐はす佛哉

念佛の申賃とる日永哉

此は盆及彼岸を云つたのであらう。

次に此に罵倒家皮肉家不平家の眼に映する人生は

人の世や直ぐには降らぬ春の雨

隠家や窗のない聲で「福は内」

蓮の花少し曲るも浮世哉

人ありと見せる草履や田番小屋

然し罵倒にしる皮肉にしる茶花にしるその多くはたとへば弱い犬が虚しき影に吠ゆる様に弱者が其の心中の弱所を蔽はんがために強者に向て叫ぶ聲である。一茶のそれも其の境遇が前記の如き経路を辿て遂に彼をして罵倒家皮肉家不平家たらしめたのであるから其の多くはこれに屬す。故に彼は時々本音を吐く

歸る雁を

行くな雁どんても同じ憂世ぞや

山櫻そなたの春も三十日哉

花の世を無官の狐鳴きにけり

何だか狐が一茶自身の様に聞ゆる

彼はその境遇上晩年に至つて始めて妻帯した。即彼の五十三才の時文化十一年水内郡赤川村の常田菊女と婚した。菊女死するや彼は更に翌年飯山藩士の娘田中雪女と結んだが幾くもなく離縁して柏原驛のさを女なる者と婚した。一茶がかく晩年に數度妻を迎へたことに付いて或人は彼が紛争に／＼を重ねて分家した面目上必ず其の家正統の嫡子を遺さんがためであると云はれて居るが私は一茶の人物性格の上から推してそんな理

窟ぼつい理があつた様には思はれぬ一茶の句中にもそんな感慨を洩したものは一つもない様である。成程彼は紛争に／＼を累ねて分家はしたがそれは彼の當時先づ生さんとする必要からであつて自分が長男なるが故に父祖の家を繼がねばならぬ等といふ様な六ヶしい考はその當時に於いてすら之を彼に認める理にはゆかぬ其の結婚問題に付いては猶更である。即彼は第二の雪女を離別する時、

絲瓜蔓切つてしまへばもとの水

と云つて居る宛も弊履を棄てるが如くである。成程彼の先妻菊女に對する愛情は可成り眞摯なものであつたらしい彼自らの日記に（在七番日記）

文化十一年五月五日大雨

一茶智入。赤川泊

六日晴

一茶歸

同 十二年四月一日晴

妻と庭の花見

八月十五日晴

婦夫月見

留守中木瓜の指木何者か技。

更に

文化十五年三月廿一日晴

墓詣。隣旦飯。菊女孕みてより二百七十日なれば出産近により頼赤川。

一茶全道。

四月廿五日陰

淺野に入。きく男子産んだ夢。

廿七日雨

きく安産ありし夢。

又其の俳句にも

我菊やなりにもふりにも構はずに

とあるが此は全く夫婦全棲後の菊女の熱烈な愛情が呑氣な彼の胸中に一片の情愛を生むしめたものではあるまいか即七番日記にれば彼は結婚の前日文化十一年四月十日まで他行してけの淺野内町上町善光寺等を廻て殆ど結婚を意に介せざるが如き風があつた。更に其後雪女等に對する態度よりするも其の眞摯なる愛情なるものは一般妻女に對するものではなく一菊女に對する感謝の變形であつて彼女にのみ限られ彼の女の死と共に消滅したと見るのが至當ではあるまいか。要するに彼は結婚問題については當時の洒落な呑氣な樂天的な性格からして女等は財位にみて居たかも知れぬ。彼はたゞ人並みに妻を貰つたのであらう。妻の死後更に新しい妻を迎へ又は氣に入らぬ妻を離別することは彼にとつては或人の考らる様な重大問題ではなかつたらしい。偶々彼の結婚問題が晩年に起つたといふのはたゞ單に彼が其の頃に至て此方面に眼を向けたことを示すのみで別に何の意味もない様だ。

彼は宗教に對しては前の引用句にも見ゆる如く強いこと云てゐる様ではあるが其の幼時痛ましい繼母の苦を避ける場所は暖い祖母の袂かさもなければ近所の明專寺の軒下であつた。且彼は江戸に於いては谷中の本行寺に久しく住み其の門人の二休兄芳月好指月等皆僧侶なるより推すれば彼は内心には隨喜の涙が溢れて居たに違ひない。されば彼の著「オラガ春」にも誤られたる自力と他力とを罵倒して後に。

唯々自力他力なんのかのいふあくたもくたサラリとチクラが沖へ流してさて後生の一大事とは其身を如來の御前に投げ出して地獄へなりとも極樂へなりともあなた様の御はからひ次第遊ばされ下されませと御頼

み申すばかりなり

俺が座もごころへ頼む佛達

と云ひ更に又

已頭に霜を戴き額には屢々波の寄せ来る齡にて彌陀頼む術も知らどうか／＼日を費すこと云々。
と嘆じてゐる。其の作の。

何事も貴方任せの年の暮

は他力本願の眞髓と谷本博士は云つて居られる。又父終焉の記にも彼の信仰に關する記事は頗る多々一々引用するの頗に堪へない一寸七香日記を繕てみつても。

文化十二年四月八日晴

吉藏娘嫁有朝祝赤湫雲龍寺誰佛詣二倉清心寺に詣二倉夕食

同 十六日晴

掬斗に入る百万遍念佛會

筆所々に散見するその。

目出度さも中位なりおらが春

は一茶の悟り振りが覗れて面白い

一茶の趣味は頗る多方面であつたらしい殊に演劇には多大の興味を持てゐたと思はれる。これは故郷の柏原驛がまだ彼の居た時分から當今の常設劇場に類するものを有して居てお江戸歌舞伎坂東三津五郎岩井半四郎等も屢々來り彼も屢々之を見物したによるであらう（信州出のW君の話では實際劇のみは昔から盛であつた相である）江戸に出た後は猶更である彼の七番日記にも。

文化七年三月三日晴

中村座始。源之助梅の由兵衛役

同 八月廿九日

申刻夕立湯島長十郎座二見

同 十二月十日晴

中村座納

同 十二月十二日晴

森田始大阪花屋菴文通

同 十二月十三日晴

市村納淺草本煤拂開帳。

文化八年十一月一日晴

朝曇兩劇場始

文化九年三月十二日晴

は組の春と中村坐大喧嘩松二入

同 三月十三日

申刻兩中村座大喧嘩

同 八月二日晴

野尻狂言

同 十月卅日晴

江戸入顔見世見物

等を記されてゐる。更に彼の作句中劇的色彩の豊なるものも少くない。

笠でするさらば／＼や薄霞

寒念佛偈では貴殿でありしよな

馬上からオ、イオイどや時鳥

義仲寺はあれにて候初時雨

太郎冠者まがひに通る扇哉

罷り出でたるは此藪の墓にて候

終の三句は能若くは能脱化の所作事を見る様である。又直接劇を扱つたものでは。

乞食が團十郎する秋の暮

野歌舞伎や秋の夕の真中に

子供等の團十郎する扇哉

などがある。一方「芝居へ人云ふなり春の雨」といふ句を見ると一寸芝居に無關心の様に聞えるがこれは非常に好きではあるが貧乏だから仕方がないと諦めた方に解するのが至當であらう殊に成美が彼の句を評して彼に送つた語に。

頭取 曰當座のたて人他に眞似人なし云々

ヒイキ 云ひ分のあるのなひのと云ふことがあるものか日本人ひつくるめての名人く

ワル口 情がこはくて一つ風流だから切落ては請けとらぬ雪の中で御念佛で云つてゐるがいゝ。
と藝評の形式をとつてゐるを見ても彼の劇好きであつたことが覗れる。

又酒は不平家の常として少々嗜んで居た。

酒つきて眞の座につく月見哉

櫓の火や小言八百酒五杯

引かける大盃に胡蝶かな

大酒の諫言らしや閑古鳥

七番日記にも。

大醉出肆、夜丑刻大寢毫不知己板間尿云々。

又「オラガ春」にも。

其座を退けば地獄の種を蒔いて膝に群る蠅を憎み膳を廻る蚊を譏り剩へ佛の誠めし酒を飲む
とある。

動物の中では蛙と猫とに多大の興味を持って居た様である。泰然たる顔をして頓間なこと計りやる蛙と賢人らしい面をして利いた風な眞似をする猫とは一寸考へても皮肉屋の一茶の氣に入り相である。
蛙については「オラガ春」中の蛙の野送に。

夏の夕背戸に薙を擲けて福よくと叫ばばやがて隅の藪よりのさく這ひ寄りて人と同じく涼む其の面魂
一句言ひたげにぞありける。
と云ひ。

悠然と山を見て居る蛙哉

叱しても洒啞々々として蛙哉

瘠せ蛙負けるな一茶此にあり

一零頭なでけりひき蛙

俺として睨みくらする蛙哉

向きくゝに蛙のいとこはどこ哉

猫に付いては七香日記桂口猫の作に。

我友桂口ひとつの猫をめで、夜は懷に暖め晝は釜の上に撫るしかるに只管逃げ歸らんとす或時藁以てあやしげなるワグラといふもの作りてあてがふに漸く氣にや入りけんいと心よげにすや／＼と寝入りぬ。

と書いて居る。こんなことに興味と感ずる彼自身も桂口に譲らぬ猫好きであらねばならぬその句に。

戀故にぬすつと猫を呼ばれけり

うかれ猫意見を聞いて居たりけり

長火鉢の方に婆さんが見ゆる様だ

寝て起きて大欠伸して猫の戀

大猫のの尻尾でなぶる小蝶哉

戀猫の抜からぬ顔で戻りけり

最後に彼の俳句の內的及外的の分解がして見たい。彼の父の彌五兵衛は號を宗源といつて辞世の句に。

おさらばぞ仲良く致せ門涼み

といふのがある。故に一茶は先天的に俳人の血を傳へてゐる。然し彼の父の許にありし十四年の多くは繼母のために、酷使されたので親しく父より俳諧のことを聞く等ことは決して無かつたであらう。然し繼母は俳諧の點に關しては實に彼に偉大なものを與へた之れは即彼の非凡な着眼力と展境力とである。彼は繼母の筈の下に小さい心を悩まし氣苦勞の絶間もなかつたのであるが實に此の間にあつて彼の着眼力展境力は養れて來たのである。それは他の貧家の子弟が瑣事にもよく心付き且色々工夫に長けたると一般である。偶々それが一茶であつたが故にその點が着眼力展境力なる特種の形式をとつて表れたのである。

着眼力は云ふまでもなく非凡の境地を捉ふる力をいひ展境力とは——他に適當の語のないために頗る生硬な熟字を用ゐたのであるが——平凡の境地に非凡の閃きを馳せる力をいふもの即前者は多く見出すことの努力により後者は多く考ふことの努力に依る。

彼の着眼力は通常の俳人の容易に看過すべきことも直に捕へて見事な俳句となした。

陽炎や手に下駄穿いで善光寺

これは足壁の乞食である。

大佛の鼻から出たる燕かな

此壁に樂書無用梅の花

柿の木でアイト答ふる小僧哉

書賃の密柑見いゝ吉書哉

蚤のあと數へながらに添ひ乳哉

彼の展境力は通常の俳人なら月並に歌ふべき俳句を全程奇警優秀なものと化した。

入相の鐘に撞き出す螢哉

朝顔や人の顔にはそつがある

鼻よ面癬直せ春の雨

春雨や喰れ残りの鴨が鳴く

冬は獵期であることは無論である。

江戸時代の彼は主として葛飾派の二六庵に在つて俳句の研究に従事したのである。葛飾派の俳祖はかの素堂である。素堂は芭蕉とともに貞徳門下の高足で

目に青葉山時鳥初鰓

浮葉卷葉此の蓮風情過きたらん

等の句で有名である。此の二人は先づ談林派の撲滅に従つてこゝに新生命ある俳句を建設した。然し彼は生中漢學の素養があつた丈句に圭角があつて——それは前の二句にも明に視れるのであるが——年と共に閑雅幽寂の芭蕉派と相容れざるに至り遂に葛飾派なる一派をなすに至つた。即一茶の學びしは決して蕉風の正道ではない。然し彼は後に又此の葛飾派とも相容れずして二六庵を棄てた。然し決して蕉風の正道に歸つたものでもない。彼の句は之を内的に見るとき矢張り彼自身のものであつてその傳統は之を辿るに由もない。次に彼の句を外的に即技巧上から見るとき、彼の好んで用ゐた技巧を凡そ二つに分つことが出来る、其の第一はよく無生物を人格化して奇警なる俗語を其の間に挿入するの手段である。

足許の明い内や歸る雁

行き掛けの駄賃に鳴くや歸る雁

鶯のやけを起すや終ひ際

朝起の古風を棄てぬ燕哉

親分と見えて上座に鳴く蛙

時鳥劍もほろゝに通ひけり

手初めは小雷にて濟すなり

此れ限りと見えてごつさり春の雪

晝の蚊の來るや手を替へ品を替へ

わやゝと若い全志が歸る雁

擬人ではないが矢張り俗語が一句の生命をなして居るものも少くない。

青葉して中ブラリンの曇哉

月の梅酔の蒨蕪のと今日もたつ

技巧の第二は想像の一階梯を飛び超へることである。

朝涼や汁の實を釣る脊戸の海

魚と云はすに直に一段飛んで汁の實といひ。

、白壁の誹られながら霞みけり

白壁の主人と言はず直に白壁を捕へ來る。

此の第二の技巧に屬するものは第一に比して稍々少數の傾がある然し一茶の句を特に一茶のものたらしめて居るものは却て此の方の技巧である。

たゞ日本一の雄大な背景を有する山岳國信州——私はまだ不幸にして信州の地を踏まないが——に産れた彼に奔放濶達な句が一つもなく却て優美可憐なものは之を散見する。

優美なものは

線香や半内堂の春の雨

半内堂は江戸の淺草にある縁結びの神様である。

傘さして箱根越すなり春の雨

芭蕉「箱根越す人もあるらし今朝の雪」と比して劣らず。

逝く春に一足遅き矢走哉

凡菫の「矢走のる嫁よ娘よ春の風」に比して更に優婉。可憐なものは

餅つきが隣にきたといふ子哉

人の聲に子をひきかくす女鹿哉

離れ鶉の子の啼く舟に戻りけり

母馬が番して飲ます清水哉（小金原）

などがある。これは一寸不思議の様であるが然し私共はこれを訝る前に當時の柏原驛の状態を知らねばならぬ。當時柏原は實に加州候參勤交代の宿營本陣の所在地で宿驛傳馬繼立の間屋場に當り、貨物の集散人馬の往來も繁く從て風情も奢侈に流れ人情も優暢で、詩歌連俳香道茶道蹴鞠謠曲歌舞技などが行れ今日私共が想像する様な山間の孤驛ではなかつた。然も一茶は此處に居ること僅に十四年であとは大半花のお江戸で暮したのである。故に其の句に雄大なものがなく却て優雅なものを見出すのは怪むに足らぬ。否もし彼を一生順境に居らしめたなら或は寥太嵐雪を凌ぐ優雅な作者となつたかも知れぬ。

要するに一茶は一茶である芭蕉でもなければ蕪村でもなければ子規でもない。彼は天明の中興期から明治の

復興期の間にあつて忽焉として現れ忽焉として消れた彗星である。私共は彼の以前に一茶を見出すことが出来るが又彼の後にも一茶を見出すことが出来なかつた。實に彼は俳星中の妖星である而してその發する赫々たる光の光度は如何なるものにも敢へて譲るものではない。

—大正八年六月—

河

原

佐々木 高遠

「あゝ俺は何たる……」と彼は唇を噛みしめ乍ら呻くやうに呟いた。或時は辛く又悲しく或時は懐しく又戀しく思つた過去が、今は唯一色に灰色に見えた。否灰色とだけでは盡せない、夫れはあの人殺しの現場に送つた血の凝固し、こびりついたねば／＼した暗黒色だ。振り返る人を戦慄させる爲に、側を過ぎらうとする人を氣絶させる爲に、故意に拵へた造化の陷阱だ。惡戯だ。其の凄慘なまゝ、臭氣にあらゆる人を眩暈せしめようとして企てられた妖魔の手段だ。自ら底知れぬ死の谷に飛び込ませようとして肉迫する猛獸の毒牙だ。

「はッはッは、どうでもいいぢやないか」

初夏の蒸す様な陽光も既に傾きかけてゐた。晴れ渡つた空の奥にはぼんやり晝の月が顔を出して皮肉な苦笑を洩してゐる。其の白い月、大空に只一點掘られてゐる其の白い月の穴を潜り抜けたら俺を雙手を舉げて待つてゐる神様がお人好しの神様がゐらつしやるのかも知れない、此の空間の向ふ側の世界へ行けたら、否